宗像

春季大祭斎行

四月一・二日の両日、春季大祭が斎行された。例年は境内の桜が咲き誇る中での斎行であるが、本年は開花が遅くまだ数輪しかほころびていない中ではあったが、春の陽気に包まれ多くの氏子・崇敬者らで賑わった。

四月一日午前十一時、神島宮司以下神職、氏子奉幣使、福岡県神社庁長、立部瑞真鎮国寺副住職、主基地方風俗舞保存会員、浦安舞奉仕者、総代等が斎館前に列立し本殿へ参進。神島宮司が国家鎮護・皇室安泰・五穀豊穣を祈念し祝詞奏上、続いて氏子会を代表し伊規須久輝氏（宗像市河東）が奉幣詞を奏上した。

次いで、保存会の御奉仕により、宮中舞楽の手振りを伝える「主基地方風俗舞」、更に玄海中学校女子生徒による「浦安舞」が奉奏され、麗らかな神苑に悠遠な平安絵巻が繰り広げられた。

翌二日は、午前十一時より二日祭が斎行され、海上安全、大漁満足が祈念された。祭典後には海洋神事奉賛会事業に対し功労のあった会員十二名に、当大社より感謝状と記念品が贈呈された。

その後、高宮、第二宮、

余滴

神道では、清浄であることを旨とする。あらゆる神事では必ず最初に修祓（お祓い）を行うのは、不浄な存在、罪穢を取り除くためである。古くは罪穢という観念が重要な意味を持ち、清浄を生活の基本として、日本各地で六月と十二月の晦日には大祓がおこなわれ、国民、国土が祓い清められた▼罪穢とは、悪しき心・行い、死、穢いこと等、人が忌み嫌う全ての事柄のことで、人の表面、内面全てに対応する。ある説によると、穢れとは「気枯れ」の状態、気力の衰退を意味することともいわれる▼また「言霊の幸う国」とわが国を呼ぶように、古代では言葉には力があり、発した言葉通りに現実化すると考えられた。その為、罪・穢に通じる言葉「死」は、「なおる」と別の言葉に言い換えた。このような言葉を忌詞という。余談ではあるが当大社の沖ノ島でも忌詞は使われていた▼罪や穢は数え切れない程多い。実際に一つも犯さない、触れないということは難しい事だ。清浄に生きようとする心持ちが重要であろう▼清浄を具体的な言葉で現すなら、正直が当てはまるのではないか？「正直の頭に神宿る」という言葉もある。正直に生きる事を日々心掛けたいものだ。

（T・M）

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪

第六十二回神宮式年遷宮

5月祭事暦

毎月1・15日 月次祭
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社祭（1日）
午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏（1日）
豊栄舞奉奏（15日）

5日 五月・浜宮祭
午前10時30分～浜宮祭
於＝宗像市神湊 浜宮
午前11時～五月祭
於＝宗像市江口 五月宮

27日 沖津宮現地大祭
午前7時大島港 出港
於＝沖ノ島・中津宮

神具・装束・授与品
井筒
装束店（福岡店） 〒812-0068福岡市東区社領1-12-10-401
フリーダイヤル 0120-055-092
電話 092-651-9456
授与品店（本店） 〒601-8348京都市南区吉祥院観音堂町23
フリーダイヤル 0120-075-820
電話 075-672-8100

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 玄江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

第三宮、宗像護国神社へと、宮司以下各神職・参列者がそれぞれの祭場へ進み、各所で春祭が斎行された。

宗像護国神社春季大祭では、福岡県護国神社宮司・田村豊彦氏、宗像・福津両市の遺族をはじめ一一〇余名が参列する中、護国の英霊をお慰め申上げると共に、遺族並びに両市民の弥栄が祈念された。

同刻儀式殿に於いては、交通安全講社祭が斎行され、講員皆様の今年一年の交通安全が祈念された。

氏子奉幣使として御奉仕された伊規須久輝氏

午後二時からは、本殿に於いて献茶祭が行われ日頃熱心に茶道を学んだ当大社巫女が、南坊流の袱紗さばきも爽やかに御点前を披露した。

かくして二日間に亘る春季大祭も無事斎行され、春の一大神事も滞り無く終了した。

この春季大祭であるが、昭和三十年代まではこの時期に当大社所蔵の御神宝・古文書を虫干しし一般に公開する祭事が行われていた。これを秋の「放生会（ほうじょうえ）」に対し「保存会（ほぞんえ）」と称し、人々の楽しみとなっていた。

昭和三十九年の宝物殿竣工に伴い、保存会の呼称もいつしか耳にしなくなったが、今も昔もこの保存会（現＝春季大祭）の時期は、神郡宗像に春を告げる節目の季節として多くの人々が境内に足を運んでいる。

海洋神事奉賛会事業功労者への感謝状贈呈式

氏子奉幣使

伊規須久輝
（宗像市河東）

主基地方風俗舞奉仕者

（舞　方）
福崎　武志
清水　陽介
中野　久志
松井徳一郎
（歌　方）
石津　典秀
吉田　敏幸
中野　正徳
菊本　謙二

浦安舞奉仕者

岩佐　亜美
岩佐　春佳
岩佐保奈美
中野　美里

海洋神事奉賛会事業功労者

高橋　義治（宗像漁協・本所）
花田　経広（　〃　）
舩越　寛人（同・大島支所）
遠藤　利男（　〃　）
村田　繁美（同・地島支所）
村田　春治（　〃　）
広渡喜三男（同・福間支所）
広渡　末夫（　〃　）
花田　幸夫（同・津屋崎支所）
花田　和明（　〃　）
広橋　武喜（鐘崎漁協）
七田　昭三（　〃　）

氏八満神社春祭

四月十三日（日）午前十時半より、当大社と所縁深い菊姫（第七十八代大宮司氏男の室）、山田の局（第七十七代大宮司正氏の後室）、侍女四柱（花雄局・小夜女・三ヶ月・小少将）を奉祀する氏八満神社で、高向権宮司に神職一名が出向し春祭が斎行された。

朝から小雨の降る天候であったが、祭典時刻には回復し、田島区長の奥薗睦氏をはじめ、田島区総代、地元の氏子又その児童等、境内に入りきれないほど多数参列し、午前十時三十分発御祭が斎行された。

高向権宮司が御神璽を神輿へ移すと、宗像大社へ向けて児童達によるリコーダーの演奏のもと御神幸が始まった。

一行は田島区内をゆっくりと御神幸、御旅所とする当大社祓舎に到着すると着御祭を斎行。神島宮司、奥薗区長が玉串拝礼を行った。

午前十一時五十分参拝者で賑わう宗像大社を後にし田島公民館へと御神幸が始まる。釣川沿いを進んでいると行き交う車の方からも珍しそうに観る人や、手を合わせる人など、児童達の演奏にも熱が込もっていた。正午過ぎ、田島公民館に到着。一同祭事を無事に終えた安堵感からか、満足そうな面持ちで直会を楽しんだ後、午後二時御神璽を還御する還御祭が行なわれ、今年の春祭を終えた。

氏八満神社の例祭は春と秋

御神幸の様子

に行なわれるが、御神幸が行なわれるのは春だけであり、氏子の面々からは「また来年が楽しみだ」と言う声もあり心待ちにしている神人和楽の行事である。

御旅所とした当大社「祓舎」での着御祭

氏八満神社へ還御される同社の御神輿

春季奉納剣道大会

四月六日、春季恒例の奉納剣道大会が開催された。

この大会は例年、御本殿横の境内で開催される「野試合」であるが、前日の予報で当日が雨模様とのことであったため、予備会場の玄海中学校体育館での開催となった。

午前九時の開会式には、選手（小・中学生）・審判・父兄ら約四〇〇名が同校体育館に集合、神職よりお祓いを受けた後、宗像大社を遥拝した。

試合が始まると開会式の静寂から一転し、日頃稽古で鍛え上げた自慢の技を披露しようと掛け声を張り上げて相手に挑み、それに熱狂する応援団らで会場は終日喚声に包まれた。

約六時間に亘って繰り広げられた熱戦も、午後三時には幕を閉じ、勝利に歓ぶ者、悔し涙を流す剣士らが、次回こそはと決意を新たに稽古に励むことを誓った表情で会場を後にした。

第三十回 春季奉納吟詠大会

四月五日、春麗らかな陽気の中、春季恒例の吟詠大会（主催＝鶴洲流、河野鶴洲宗家）が開催された。この大会は昭和五十一年より奉納され、今年記念すべき第三十回大会を迎えることとなった。

午前十一時、北九州地区を中心に近隣地区より同会会員約七十名が参集、正式参拝並びに奉納合吟が行なわれた。

合吟では国民道祖神の宗像大神に、松口月城先生奉納の「宗像宮」を河野鶴洲宗家に続き会員一同で献吟、まだ桜の残る境内に朗々とした声が響き渡ると、週末とあって参詣された多くの参拝者も暫し足を止め、深い感銘を受けた様子であった。

献吟後、一同は清明殿へと移動し式典が開会され宗家・河野鶴洲氏の挨拶に続き、当大社神島宮司より永年斯道の興隆に寄与された方々に感謝状と記念品が贈呈された。

その後、会員各々が日頃鍛えた自慢の喉で素晴らしい吟詠を順次披露され、午後三時には当大社における日程の全てを終えて、一同バスにて直会会場へと移動した。

表彰された方は次の通り
（順不同、敬称略）

豊見山 鶴虹
古野 肯洲
神崎 鶴石

「宗像宮」 松口 月城

三神鎮座す宗像宮
天孫を擁護して仁徳崇し
神武皇謨之に依って就る
肇国の大業之の中に成る
筑紫之山玄海之海
一山一水皇風を仰ぐ

鎮国寺「花まつり」宗像大社～鎮国寺間を稚児行列

桜花爛漫の四月六日、宗像観光協会の主催による「鎮国寺花まつり」が催され、約二〇〇名の稚児に保護者等約五〇〇名が、宗像大社～鎮国寺間で稚児行列を行なった。

平成十八年、お釈迦様の誕生日（四月八日）に合わせて開催されたこの行事であるが、地域の幼児達にも思い出をと昨年より稚児行列も開催されるようになった。

当日は晴天に恵まれ、境内の桜もちょうど満開と絶好の日和の中、一同当大社に参集。午前十一時に当大社拝殿でお祓いを受けた後、山田勝智県議、谷井博美宗像市長が騎乗する神馬を先頭に、宗像大社氏子青年会（小林栄二会長）の誘導により、稚児装束に身を整えた一行は大行列で鎮国寺まで向かった。

同寺到着後、参加者らは玄界高校邦楽部による「玄界太鼓」の演奏や、振る舞い鍋を満喫する一方、桜花爛漫の境内で記念撮影をするなど春の一日を楽しんでいた。

鎮国寺は弘法大師（空海）が中国より帰朝後、先ず宗像大社を参拝し大同元年（八〇六年）に日本で最初に創建された真言宗の古刹である。本堂には宗像三女神の本地仏が祀られており、当大社の神宮寺として深い歴史を有する寺院でもある。

道の駅「むなかた」釣川河口の宗像市江口にオープン

四月十二日、北部九州最大級の「道の駅」が、当大社に程近い宗像市江口にグランドオープンした。

直売所、レストランとも、旬の地元農水産物にこだわった県内で十番目の道の駅。オープン前から約二〇〇メートルの人の列ができるなど、初日は施設の内外で大混雑した。

開店に先立ち、四月八日に竣工祭が執り行われ、当大社神職二名奉仕のもと関係者が参列し、厳粛に祭典を終えた。祭典後は代表取締役花田省蔵氏より「地域に貢献出来る施設として従業員一同で努力したい」との挨拶が行われた。

道の駅むなかたは、国と市が約六億五、〇〇〇万円を投じ整備。木造平屋建てで、敷地面積約一万三、七〇〇平方メートル、駐車場は一七六台収容と県内最大級。地元の宗像市商工会、宗像観光協会、JA宗像、宗像漁協、鐘崎漁協の団体が設立した会社「まちづくり宗像」が運営する。

以前までは当大社大駐車場正面のアクシス玄海にて観光物産館として営業を行っていたが、集客の増加に伴ない手狭になりこの度「道の駅」としてリニューアルされた。初年度の売上目標は売上高七億五、〇〇〇万円、来館者五〇万人を目指している。

オープニングセレモニーの様子

竣工祭の様子

㈱新出光鎮座 宗像神社春祭

明け方までの雨も止み、朝から快晴となった四月七日(月)午前十一時より、㈱新出光の本社ビル(福岡市博多区呉服町)屋上に鎮座する宗像神社で、当大社より高向権宮司以下神職二名が出向し春祭が斎行された。

春祭には、出光芳秀社長、出光豊会長ら役員の方々が参列、同社・グループ関連会社の繁栄と安全、社員の幸福を御祈念した。その後、稲荷神社を参拝し全ての神事を終了した。

当大社御本殿をそのまま縮小した「宗像神社」神前での春祭

祭典後には、参列された社長、会長をはじめ役員の皆様と共に直会が催され、神社神道、宗像大社や沖ノ島のことなどが話題となり、終始和やかに行われた。篤信家の社長は「是非一度は沖津宮に参拝したい」とも語られ、宗像大神に寄せる思いが伺えた。

同社の屋上には、宗像大社の御本殿をそのまま縮小した社殿が二宇あり、宗像神社と稲荷神社の二社を奉斎され、会社を挙げて崇敬されている。年度はじめの春に宗像神社を、年明けの初午祭で稲荷神社の祭典をそれぞれ斎行され、いづれも当大社から神職が出向奉仕している。

大神様の御神徳を戴かれ、同社の今後益々の弥栄を心よりご祈念申し上げます。

㈱新出光本社ビル

本社ビル屋上に鎮座されるもう一宇「稲荷神社」

新人巫女研修を実施

～大島・中津宮採用を含む、六名の巫女見習が参加～

今年度採用予定の六名の巫女を対象とした内部研修が、三月二十四～二十六日の三日間にわたり、神職・巫女・事務員らを講師として実施された。

六名の詳細は、紙面別紙の紹介欄の通りだが、三月に県下の高等学校を卒業し、宗像市とその近郊に在住する初々しい巫女の卵達である。

しかし、一般家庭の子女にとって、神社神道や作法、専門用語などは全く特殊な世界。正式採用後、巫女としての自覚をもち、実際の社頭での応対に充分慣れていただくことを目的とした研修である。

初日は、午前中来客者や電話・社頭での応対の仕方、巫女としての心得の研修が行われ、さらに実際社頭につき実務研修を行った。午後からは御祭神や神社の御由緒を中心に、祭典行事・境内諸施設の解説が行なわれた。

二日目は、午前中に神社の調度・装束・授与品などの名称・用途について学び、午後からは祈願における作法を研修した。

最終日は、神社の規約・規定について説明があり、各自が当大社への諸届や手続きの出し方等について学んだ。

研修を受けた六名には瞬く間に進んだ三日間かと思うが、祭典や社頭等で実際に参拝者と接することで研鑽を積み、一人前の巫女職として更に成長していく。

新人紹介

4月1日付で、神職3名、巫女6名の計9名の職員が新たに加わりましたので、下記の通り、ご紹介致します。

①名前 ②生年月日（年齢） ③出身地 ④経歴 ⑤特 技（趣味） ⑥抱負

①日高　庸介（ひだか・ようすけ）
②昭和57年8月5日（25歳）
③宮崎県宮崎市
④大社國學館、京都國學院専修科
⑤少林寺拳法初段、読書、映画鑑賞、高校時代はレスリング部でした。
⑥幼少より神社、神話が好きで神職を目指しました。沖ノ島の古代祭祀にも大変興味があり、宗像大社への奉職を希望致しました。念願叶い、御奉仕させていただくこととなり、皆様に愛される笑顔の絶えない神職になりたいと思います。

①鈴木　祥裕（すずき・よしひろ）
②昭和60年8月13日生（22歳）
③茨城県筑西市
④國學院栃木高、皇學館大學文学部神道学科
⑤ラグビー、球技全般、マラソンも好きでホノルルマラソンを走ったこともあります。高校時代はラグビー部でした。
⑥社家（山倉神社）という環境で育ち、祖父や父の背中を見て神職の道を歩むことに決めました。未熟者ですが、人々に幸せを与えられるような神職になりたいと思います。

①船越　裕介（ふなこし・ゆうすけ）
②昭和62年4月2日（21歳）
③鳥取県倉吉市　④大社國學館
⑤音楽鑑賞、中学・高校とソフトボール部でしたので、球技には自信があります。
⑥社家（村上神社）に生まれ、幼少より父が奉仕している姿を見て育ち、長男として跡を継ぐために神職を目指してきました。昨年、宗像大社で実務研修をさせていただき奉職を希望しました。御社で勉強し、胸を張って自家に帰れるよう頑張りますので、ご指導よろしくお願いします。

①西原　央枝（にしはら・ひさえ）
②平成元年7月3日生（18歳）
③福津市中央
④博多女子高等学校　トータルビジネス科
⑤読書、小説執筆
⑥家族で車のお祓いに来た際に、巫女さんの姿をみて自分も御奉仕したいと思い奉職を希望しました。
これから頑張りますので、よろしくお願いします。

①葛屋　茜（かつや・あかね）
②平成元年8月16日（18歳）
③芦屋町緑ヶ丘
④折尾愛真高等学校　普通科　保育コース
⑤音楽鑑賞、ライブに行くこと。
テニスもします。
⑥初詣で参拝した際に巫女さんを見かけ、小さい頃からの憧れでした。
なかなか経験できない仕事、何があっても笑顔で頑張ります。

①石井　あゆみ（いしい・あゆみ）
②平成2年1月4日生（18歳）
③古賀市花見 ④古賀高等学校 総合ビジネス科
⑤音楽鑑賞、テニス。ワープロ1級、情報処理1級、電卓1級、簿記1級、商業経済3段、珠算3級、暗算2級、スピード入力検定初段、英検3級、漢字準2級と資格も沢山もっており、事務処理は得意です。
⑥幼少時宗像大社に参拝し、巫女さんがすごく優しくて憧れていました。事務処理は得意ですが、少しあがり症ですので対人面を磨いて、一日もはやく一人前の巫女さんとなり、参拝者の皆様に気持ちよく参拝していただけるようにしたいです。

①岡田　華代子（おかだ・かよこ）
②平成2年1月13日（18歳）
③宗像市光岡
④東海大学附属第五高等学校　理数科
⑤車とバイクに乗ること。
ライブ、演劇鑑賞、ショッピング。
書道は6段です。
⑥持ち前の明るさを生かし、いつでも笑顔で参拝者の皆様をお迎えしたいです。精一杯御奉仕しますので、よろしくお願いします。

①菊池　優希（きくち・ゆき）
②平成2年1月24日（18歳）
③宗像市日の里
④香椎工業高等学校　電子機械科
⑤アーク溶接やガス溶接、何でもくっつけます。車は勿論、フォークリフトも運転できます。珠算1級、暗算1級、特殊無線2級と事務処理も得意です。
⑥生れた時の初宮、七五三、みあれ祭に初詣と宗像大社に参拝しており、高校に募集がきた時には運命だと思いました。これから巫女として、精一杯頑張りますので、よろしくお願いします。

①古賀　有加里（こが・ゆかり）
②平成元年12月19日生（18歳）
③宗像市大島　④玄界高等学校　普通科
⑤最高の笑顔と民宿「津和瀬」の手伝い。
中学時代はバレー部の主将でした。
力仕事は得意です。
⑥沖・中両宮奉賛会長古賀理の孫です。さらに高校時代には宗像大社の奨学金受給生でもありました。小さい頃から、宗像大神様に抱かれて育ってきましたので、巫女として奉仕することを希望しました。中津宮は私に任せて下さい。

（続）浜の寄物

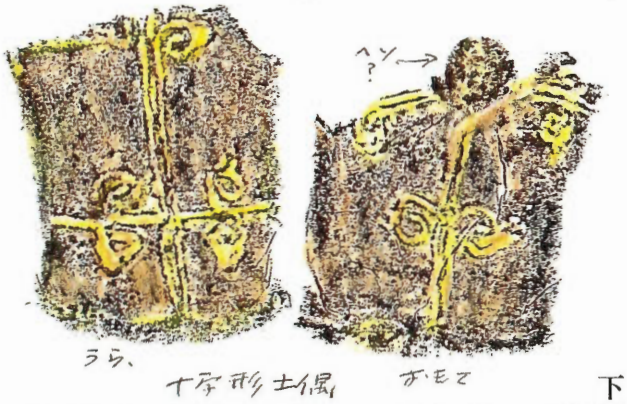
225

いしい ただし

東北の縄文時代を考えると、西日本に比べて、はるかに栄えていたことが分かる。縄文人の生活を支えていた主食の木実、根菜が豊富であり、それに鳥獣類、海の幸・川の幸に恵まれていたからであろう。それが縄文文化を育んでいたのである。その一端を示すのは八戸市・是川中居遺跡に見られるような、クリ、トチ、クルミなどの殻でできた分厚い食物残滓の堆積層がそれをよく物語っている。主食のそれはアクを抜き、クリは乾燥されたり、粉末して、餅状やクッキー状に焼かれたりしたであろうし、種々の調理をされていたのである。豊かな自然によって、動物もイノシシ、シカやクマ、その他の小動物類、鳥類も多くて、人と動物と自然の生活のサイクルがうまく回転していたのである。それは大量の土器や石器類を生み多種多様に使われていた。東北の博物館や資料館、個人の収集品を見ながら、東北縄文の力強さを感じた。土器に刻された文様のなんとダイナミックに表わされていることか。

考古学者の小林達雄氏（国大名誉教授）によれば、道具には第一の道具と第二の道具があり、第一のそれは生活を維持していく日常的道具であり、古今東西のすべての文化に共通するものである。第二の道具は、精神的、宗教的、遊具的で、それぞれの民族によって異なっているという。

私が東北で見たもので、第二の道具に入る土偶は興味深いものがあった。個人の収集品は直接手に触れることができ、何か伝わってくるものがあった。



土偶は時代で形も異なり、種類も、十字形、ハート形、山形、出尻、筒形、みみずく、遮光器、蹲踞、X字、有鬚、三角形などがある。

私が直接手にとったのは、十字形土偶で、頭部、体部、両手は作られて十字形をし、足部がない。体部の左右に乳房と思われる突起（瘤）があり、下部に臍か妊娠をあらわした突起がある。その突起の周りや、裏側には蕨のような文様があり、私には、体内の生命力をあらわしたものか、体内をかけめぐる血管をあらわしたかにも見える。

十字形土偶のなかには頭部や胸部、肩や腋の下に、小さな貴通孔をもったものもあり、懸垂されたものと思われる。

土偶はマツリが終わった後に砕かれていること、女性を形どっていることしか、まだ分かっていないが、近年大規模調査が行われ、関東や東北で大量に出土しているし、まれであるが完形品にちかいものがある。不思議な謎にみちた土人形だが解明も近いであろう。

第五六一回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日〆切

宗像市 田久 巻桔梗

本殿に挙式せるあり魂振りの音かろやかに響く三月

〔評〕（魂振り＝拍手・柏手）「かろやか」の話が挙式の雰囲気をかもし出し、春さきがけの三月の結句もびしっと決まっていて気分の通った一首。

宗像市 大島 杉田禮子

読経は若き僧なり本堂に春の彼岸の風通りゆく

〔評〕若い僧の読経の声と吹き通りゆく春風、正に彼岸そのものである。若い僧と風、取り合せの妙が生んだ秀作。

宗像市 田野 森甲子

うぐひすの声を聞きつつ地を這ひて草取り出来る喜こびにをり

〔評〕元気に働けるよろこびを讃歌する鶯の声が一首に明るさを加味している。

宗像市 東旭ヶ丘 天野玲子

白髪の紳士はすっと席を立ち我に坐れと仕草で示す

〔評〕加齢すると電車の中で立っていることは苦痛でさえある。席を譲ってくれたのが白髪の紳士とあれば喜びは倍加する。

北九州市 八幡西区 吉田ウト子

抱かれて神にまみゆるみどり児に青き空より風花の舞ふ

〔評〕青は若さと希望の象徴の色であり、加えてみどり児に対する祝福の風花である。

福津市 中央 中村勇

津屋崎の旧小学校に合宿し海に遊びし大正なつかし

〔評〕素朴で純真であった時代をなつかしむうた。

宗像市 田久 井上光

たわわなりし朱実無くなり来ぬ鵯ら寂しき木末に霰たばしる

〔評〕木の実と鵯を詠って、何か人の生きざまをも暗示しているような一首である。

宗像市 日の里 大和美由紀

紅梅の咲き満っ庭の木の下ににごり酒酌み夫の古希祝ぐ

〔評〕梅を愛でた万葉人にも通ずる祝盃である。

福津市 若木台 野間精一

群落し照り輝けば対馬ではなんじゃもんじゃを海照らしといふ

〔評〕対馬の鰐浦のものは天然記念物に指定されている。「海照らし咲いて対馬の北岬」石原八束「ひとつばたご咲く浦潮の濃かりけり」の句を思い出す。

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦

にぶ咲きの杏の枝に止まる雀首をしきりに動かしている

〔評〕にぶ咲きは二分咲き、それと三句の字余りは気になる。氏の作としては物足りない。

北九州市 戸畑区 田中ハツセ

にわとりの足思はする手の甲を年輪のごと皺がうづむる

〔評〕二句は「足思はせて」とすると三句以下にうまくつながる。

福津市 中央 池浦千鶴子

鳩に餌をやるなの看板かけられてベランダに朝の日白くかがやく

〔評〕「看板かけらしベランダ朝の」ではないか、原作ではかけられた所とベランダは別々の場所のようである。

福岡市 南区 井田有久衣

亡き夫の徐勲の賞状胸に抱き寿ぐ君はこの世にいまさず

〔評〕徐勲は叙勲。亡き夫と君は此の世にいまさずが重複しているのが惜しい。

うきは市 浮羽 向則正

部屋隅の紅孔雀という蘭の花ふた月越えて色あざやけし

〔評〕下句は「ふた月越えてなほあざやけし」ではないか。

宗像市 光岡 則松芳子

曇天の切れ間を射して陽はそそぎ春の光線幾何模様となす

〔評〕陽と春の光が重複するなど一首が、ごたごたしている。「曇天の切れ間より射しそそぎゐて春のひかりは幾何模様なす」と、すっきりしたい。

選者詠

シュレッダー買ひきて身辺整理する写真手紙を先ず手始めに

皺寄せは常に吾らに先ずくると不況を嘆き理髪屋は言ふ

列を組み泳ぎてをりぬ水槽に飼はれてもなほ真鯵の稚魚は

第五三六回 俳句作品集

宗像市 日の里 花田いつ枝

就職の決まりし一報桃の花

編集後記

紙面の通り、フレッシュな新入職員が入ってきました。退職者を見送った寂しさの後でしたが、また活気が戻り新体制で皆様をお迎えします▼さて、昨年から、若手神職を中心に部署・職制を越えてチームを編成し、授与品・境内設備・体制等々の見直しを進めてきました。しかし、妥協することなくにこだわりをもち、議論を深めれば深める程、実現には時間と労力を要することとなり停滞していました▼そこで思うところあり、急遽当大社御祭神の親神様でもあり、六十二回目の式年遷宮を控える「伊勢の神宮」（以下＝神宮）へ、何年か振りに参拝してきました。学生時代を過ごした地で、過去何度も参拝や実習を行いましたが、神職としての経験を何年か積み、迷いや悩みを抱えながら今回は一人で訪れてみました▼天候に恵まれたことも幸運でしたが、今までとは全く違う見方ができ、改めてその懐の深さに感動を覚えました。と同時に、自然との調和を謳い、全く手を加えていないように見られがちですが、境内のサインや設備、授与品やそのディスプレイに人員配置、神木や川の流れといった景観に至るまで、その一つ一つが工夫され、試行錯誤の成果であることを感じ取ることができました▼皇祖・天照大神を奉斎し、日本人の総氏神ともいわれておりますが、全国津々浦々の我々神職は「本宗」と仰いでおります。その「本宗」の真の意味が、この歳になってようやく理解しつつあるような気がします。（M・O）

発行所 宗像大社社務所 宗像会
〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311（代）
発行人 蕃津幹之
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ
毎月1日発行 定価1年送料共1,000円